

PROGRAM NOTE

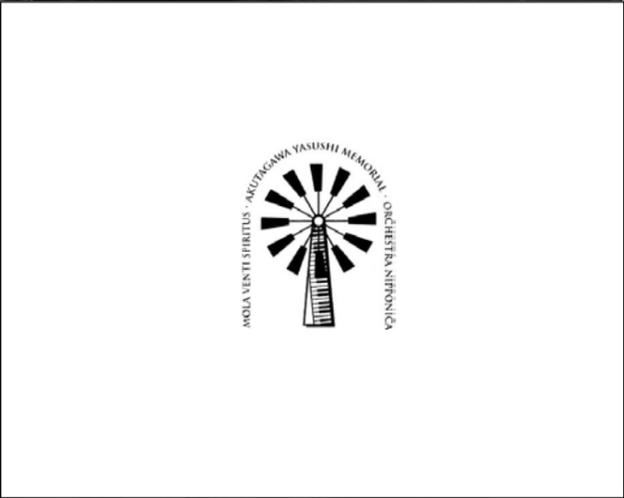
解説

奥平 一

菅原明朗 (1897～1988) がイタリアの作曲家ピッツェッティ (1880～1968) の交響曲イ調を聴いたのは、1940年の暮れ、東京銀座の歌舞伎座でのことであった。この作品に大きな感銘を受けた菅原は、4半世紀後の1967年に約半年間イタリアに滞在して、イタリア文化を探索しながら各地を巡ると共に、はじめてピッツェッティとの面談を実現した。ところが、ピッツェッティは翌年1968年2月に逝去する。菅原はこの1968年に、イタリア滞在の印象を基にして交響的幻影「イタリア」を作曲する。「イタリア」は、おそらくピッツェッティの作品から菅原が得た方法論に基づいて作曲されている。そして、3年後の1971年にはピアノ協奏曲を作曲して、そこにイタリアのバロック音楽の楽想から、自作「イタリア」の楽想までを投影し、且つ規範にとらわれない音の遊びを駆使した。ピアノ協奏曲は、初演である。

【菅原明朗とイタリア文化】

菅原明朗は、1897年(明治30)兵庫県明石市に生まれた。日本の洋楽黎明期の作曲家たちを列挙すると、菅原が世代としてどのあたりに位置するかが見える。菅原の対位法の師であり軍艦行進曲(1897/1900)を作曲した瀬戸口藤吉が1868年生れで29歳上、日本で作曲家として最初の海外留学生となった瀧廉太郎が1879年生れで18歳上、日本で最初に本格的なオーケストラ作品を作曲した山田耕筰が1886年生れで11歳上、菅原が才能を評価し、陸軍軍楽隊の作曲家でありながら優れたオーケストラ作品を数曲作曲したと言われる大沼哲が1889



1967年 ピッツェッティ宅にて 左は愛娘永井袁果さん「菅原明朗先生九十歳を祝う会」機関誌より転載

年生れで8歳上、である。

また、菅原と同世代の作曲家たちとしては、次の名前があげられる。箕作秋吉1895年生れ、大中寅二1896年生れ、下総皖一1898年生れ、近衛秀麿1898年生れ、宮原禎次1899年生れ、である。

このように俯瞰してみると、オーケストラ作品を本格的に作曲した作曲家は、山田耕筰を嚆矢として、箕作秋吉、宮原禎次くらいであろう。最近再評価進む近衛秀麿は、作曲もしているが業績の多くは編曲である。山田はベルリンでマックス・ブルッフ

菅原明朗 イタリアへの思慕

菅原明朗のイタリア体験と創作年表

菅原明朗の年譜などから、イタリア体験とイタリアに因む創作活動をひろってみました。菅原がイタリアへの思いを募らせていった足跡の一端をおわかりいただければと思います。

西暦(年齢) イタリアに関連する体験と創作

- **1912** (15) 京都二中でイタリアのオペラ作者を知る。
- **1918** (21) OST(オルケストラ・シンフォニカ・マンドリーニ)のメンバーとなり、マンドチェロを担当。
- **1919** (22) 奈良に移り住んだ時期(～1926)に、コレリやヴィヴァルディからバロックの音楽に親しんだのも此の頃で、それとクラシックの中間にあるチマローザを知るようになり、ハイドンやモーツァルトの音楽に対する考えを一進した。
- **1921** (24) イタリアに注文したチマローザの楽譜届く。
- **1923** (26) 京都の古書店でチマローザ『秘密の結婚』スコアみつける。
- **1925** (28) ロッシーニのピアノ曲聴く。欧州の友人からチマローザとレスピーギの楽譜贈られる。
- **1926** (29) マリピエロの管弦楽曲『チマロジアーナ』を知る。
- **1932** (35) 同志社マンドリンクラブ演奏会でサティ、リュリ、ラモー、クーブランの曲を編曲、指揮。OST会員から退く。
- **1939** (42) チマローザの音楽を主題とする管弦楽曲を試みるが成らず。
- **1940** (43) ピッツェッティ『交響曲イ調』を聴く。
- **1947** (50) 欧州ラテン系文化に対する尊敬日増しに高まる。中世紀文化研究を始める。
- **1948** (51) ピッツェッティ、マリピエロの近作を友人宅で知る。
- **1951** (54) グレゴリオ聖歌とラテン語の勉強。以前手がけたチマローザの主題による作品の手稿譜を再入手し、新たに創作にかかる。
- **1952** (55) 『チマローザの断章によるコンチェルト・グロッソ』放送初演。
- **1953** (56) 『交響楽ホ調』作曲放送初演。オラトリオにとりかかる。
- **1957** (60) 1953年から手がけたオラトリオ『預言書』の全3部完成。
- **1963** (66) プロテスタントからカトリックへ改宗。洗礼名はイタリア読みでフランチェスコ・ジョバンニ。
- **1967** (70) 初めての欧州旅行でイタリアを訪れる。ピッツェッティを訪問。
- **1968** (71) 芸術新潮に「日本人の行かないイタリア」1～8を執筆、掲載。ローマ、スピアーク、スポレート、ルッカ、サン・ジミニアーノ、ラヴァンナ、ポンポーザを取り上げた。『交響的幻影「イタリア」』作曲初演

(1838～1920) に学びながらスクリャーピンに傾倒し、箕作は化学者としての研究の傍ら、やはりベルリンでマックス・ブルッフの教育者としての後継となったゲオルク・シューマン(1866～1952)に師事した。宮原は、東京音楽学校出身で山田耕筰らに師事している。すなわち、菅原以外は、みなドイツ系の教育を受けていることになる。

菅原は異色の経歴を持つ作曲家である。菅原の殆どの紹介文には、「フランス印象派や6人組の音楽に影響を受けた最初の作曲家であり、ドイツ音楽の影響が濃かったわが国の音楽界に新風を吹き込んだ功績は大きい。」(音楽芸術別冊日本の作曲20世紀 音楽之友社1999)というように、フランス音楽の影響が強いと書かれる。それは確かなことではあるのだが、しかし、菅原はイタリア文化への傾倒を早い時期から示していた。(当プログラムのコラム「菅原明朗 イタリアへの思慕」参照)そして、11歳の時には、明石メソジスト教会で洗礼を受けていて、後にカトリックとなり、洗礼名はフランチェスコ・ジョヴァンニである。

音楽評論家・秋山邦晴との対談で、菅原はイタリア文化への共感をこのように述べている。「初め大きな影響——刺激を受けたのはドビュッシーですね。しかし、そのころから今にいたるまで、変わらないのはハイドンです。ハイドンに対する尊敬はいまも変わりません。

ドビュッシーにつづいてわかったのがフォーレ、そして最後にわかったのがサン＝サーンスですね。いまドビュッシーに対しては、ある意味で共感も反感もありません。フォーレとサン＝サーンスはいまも共感しています。ずっと……………。

イタリアに対する共感というのは、最初からです。イタリアをのぞいてヨーロッパの文化は考えられないでしょう。欧州文明をつくりあげたのは地中海文明です。ついでヨーロッパに移ったとき、エジプト、小アジア、ビザンチンが後退した。そして、ここ

にフランス、スペインが入ってきた。両方の文化にまたがっていたのはイタリアですよ。理屈でなく、イタリアを無視して文化を考えることはできませんよ。」(日本の交響作品展－5 菅原明朗演奏会プログラム 新交響楽団1981)

日本でオーケストラ作品を作曲する作曲家で、イタリア音楽の影響を表明した者を寡聞にして知らない。これが、今日の演奏会が提示する、ひとつめの大切な点である。

【紀元2600年のレクイエム】

「紀元二千六百年奉祝楽曲大演奏会」で、イタリア政府から贈られた形で演奏されたピッツェッティの交響曲の内容は、レクイエムである。これが、今日の演奏会が提示する、ふたつめの大切な点である。

この作品は、奉祝会準備組織が、日本の外務省を通じてイタリア、ドイツ、フランス、イギリス、ハンガリーの各政府に奉祝楽曲を委嘱し、各国政府は作曲家を推挙して計画を進める、という経緯の中で作曲された。

歴史的背景は、以下のとおりである。

1931年に関東軍により中国で満州事変を引き起こした日本は、1932年には満州国を傀儡国家として成立させた。1933年、日本軍による熱河省、河北省への軍事侵略を行い、国際連盟を脱退する。1936年、2.26事件が起き、日独防共協定が締結される。1937年は、盧溝橋事件をきっかけとして日中戦争が始まり、日本は南京への軍事侵略を行う。1938年、国家総動員法が公布される。1939年には、ノモンハン事件において関東軍が大敗し、ヨーロッパではドイツのポーランド侵略による第二次大戦が勃発する。1940年、日本は北部仏領インドシナへの進駐をして、日独伊三国同盟を締結し、大政翼賛会が発足する。

1931年から1940年の初めまでに、中国大陸では10万人を



1969 (72) ピッツェッティ周年忌、記念演奏会の為に関西マンドリン合奏団と共にイタリア訪問

1971 (73) 『ピアノ協奏曲』

1972 (75) 渡欧

1974 (77) イタリアを旅行する。アスコリピチェーロ、マチェラータ、フェルモ、テラータというような観光地ではない、地方の小さな町の教会を訪れた。建築物に対する興味を持つての旅であった。

1980 (83) イタリア中世の小聖堂の感銘を『小聖堂』として作曲初演。

1981 (84) 来日したヨハネ・パウロ二世に前年作曲のレクイエム(イタリアの教会を想定してオルガンを2台使う作品)を献呈。5月より一ヶ月間イタリア旅行。ローマのカラビニエリバンド(陸軍憲兵隊軍楽隊)を訪問した。

参考資料:

松下鈞編『マエストロの肖像：菅原明朗評論集』

(国立音楽大学附属図書館、1998)、

芸術新潮 19(1)～(8)、1968 新潮社ほか

1967年(昭和42年)になって、菅原明朗は初めて渡欧し、イタリアを中心として約半年間にわたってヨーロッパの各地を訪れました。この旅行で敬愛するイタリア近代音楽の巨匠ピッツェッティ(1880～1968)の自宅を訪問することができました。併行して、雑誌「芸術新潮」誌上に「日本人の行かないイタリア1～8」と題して旅の印象を綴ります。川端画学校で6年間学び、画家をめざしたことがある菅原は、この連載の中で聖堂のモザイクや遺跡の美、彫刻家の人生と仕事について語り、翌年にはこれらをテーマとする「交響的幻影イタリア」を作曲しました。

超える日本の兵士が戦死していたが、占領の成果は中国の領土の5分の1以下であった。国内の民衆への政府の統制は厳しさを増したが、日本本土で直接の戦争被害はなく、ひとびとは消費と旅行、戦果の祝賀行事を積極的に謳歌していた(参考:紀元二千六百年〜消費と観光のナショナルリズム ケネス・オルフ著朝日新聞出版 2010。以下、多くの情報をこの書籍に拠っている)。

このような社会情勢の中で、日本は国の建国起源を、神話的歴史上の神武天皇即位の年と定めて、1940年を紀元2600年とした。

イタリアでは、1936年にイタリア帝国の建国をあらたに宣言したムッソリーニ(1883〜1945)が、1937年と1938年にローマ帝国初代皇帝誕生二千年という祭典をおこない、アウグストゥス(紀元前63〜紀元前14)の礼賛をした。また、ドイツでは、1933年にナチス・ドイツが政権獲得以降の党大会をニュルンベルクで開催することを決定した。それは、1356年に神聖ローマ帝国の帝国会議がニュルンベルクで開催されて、皇帝カール4世の金印勅書がニュルンベルクで発布されたことに、理由を置いたのであった。

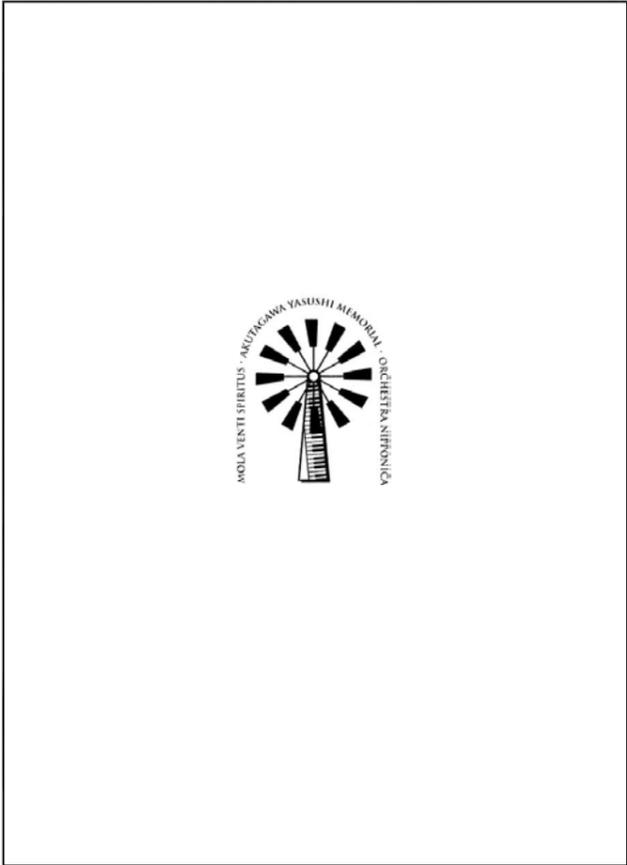
そして日本では、1940年に紀元2600年記念行事を組織するために、1935年に内閣の紀元二千六百年祝典事務局を設置、1937年には半官半民の紀元二千六百年奉祝会を発足させた。加えて、実現はしなかったが、オリンピックと万国博覧会の開催を推進したのであった。

1940年11月10日、皇居内に設営された式典には、全国、各国から55,000人が参集し、11時25分におこなわれる万歳三唱に、ラジオ放送を聞きながら唱和するよう、ラジオの販売コマーシャルが打たれた(この行事は、インターネットを通じて「NHK戦争証言アーカイブス」で20分間の映像として見ることができる)。遡る6月10日に、天皇と皇后は、紀元2600年を奉告するため伊勢神宮を訪れた。天皇と皇后の、外宮と内宮の参拝時間、午前11時12分と午後1時54分に合せて、全国民は一斉に遙拝させられたのである。

奉祝会が計画した行事は12,000以上にのぼり、行政によって15,000の公共事業計画がたてられた。新聞社が、紀元2600年の出版募集をおこない、ベストセラー本を実現した。都内の6つのデパートは、連携して「我等の生活、歴史部」「我等の生活、新生活部」「我等の国土」「我等の新天地」「我等の祖先」「我等の皇軍」「我等の精神」などの展示会を開催して、総入場者数は4,972,930人にのぼった。日本旅行協会は、16,600団体を祝典関連の地へ観光案内した。歌舞伎、演劇、舞踊、音楽、スポーツ、武道などすべての分野に催しが実施され、東京ばかりでなく、各地方でも自主的な奉祝行事が繰り広げられたのである。11月10日の後、街に貼りだされた大政翼賛会のポスターには、「祝ひ終わった さぁ働こう!」との文字が躍った。

このような、熱狂的な消費的祝賀生活の最後に催された大きな行事が、ピッツェッティの交響曲が演奏された「紀元二千六百年奉祝楽曲大演奏会」であった(当プログラムのコラム「ピッツェッティ作品の楽譜物語」参照)。

ちなみに、紀元二千六百年祝典事務局と紀元二千六百年奉祝会とによる事業の計画から実施までの全容は、1943年に「紀元二千六百年祝典記録」(内閣印刷局)全16巻として出版された。11月10日の式典出席者55,000人の名前はすべてこれに掲載されている。現在この記録は、ゆまに書房より26巻からなる復刻本として出版されている。また原本は、国立公文書館の運営するウェブサイト「アジア歴史資料センター」で誰もが閲覧できる。



菅原明朗　1980年頃、自宅にて

菅原明朗　交響的幻影「イタリア」

1981年4月5日、東京文化会館において、芥川也寸志(1925〜1989)指揮、新交響楽団によって開催された演奏会「日本の交響作品展 - 5 菅原明朗」は、優れた評論と多様かつ先駆的な企画で昭和の音楽シーンを切り拓いた音楽評論家秋山邦晴(1929〜1996)の企画によるものであった。秋山は、戦後いちはやく菅原の業績を評論して再評価した、功労者である。

上記1981年の演奏会プログラムに掲載された作曲家のノートは、おそらく「イタリア」初演時のプログラムの転載であると思われるが、この作品の理解に欠かすことができない。

『第一楽章はラヴェンナの聖アポリナーレ両天主堂のモザイクの幻影である。何故聖ヴィターレとガルラ・プラチディアを取り上げなかったかという人があるかも知れないが、私が心を打たれたのは新天主堂の身廊両側面の殉教者達の行列とクラッセの凱旋門及び正面のモザイク……その平面性の美観であった。

現在の写真技術ではモザイクの美を復元する事は全く不可能である。私の感銘の薄らがない中にそれを書き残して置きたかった。それがこの曲である。

第二楽章の「スピアーコ」は、ローマから汽車の便もバスの便もない七十数キロの山の中の小さな邑で、聖窟院はそれから更に数キロの山上にある。

しかし、ここはイタリア最古の修道院で、アッシージの聖フランチェスコも最初にここで修道した。こんな不便な所の為に、今までの美術史の前には名前さえ出なかったが、修道院はゴシック後期からルネッサンス初期の美術品で埋め尽くされている。

私は権力者の匂いの一切しないこの遺跡の美に強く心を打

たれた。この曲はその感銘から生まれた。
……前教皇ヨハネス二十三世がここへ行幸してから急にスピアーコの名前が世の中に浮かび上がり、今では観光季節だけ週何回かローマから直通バスが行く様になっている。

第三楽章の「ジョヴァンニ・ピザノ」は彼の作品というよりも、生涯を歩んだ仕事の道の感銘から作った。父ニコラの工房での徒弟としての十数年、父と共同の仕事をしたその後、父の死後、更に自ら撃取る力を失った老年期のオルビュートの仕事……立体造形美術は写真に撮すことが不可能である。私を管弦楽曲を主とした作曲家だという認識が強い様であるが、私には管弦楽曲が非常に少ない。それから、三管編成の曲は「明石海峡」「ホ調交響曲」とこの三曲(1971年現在)だけである。そしてこの「イタリア」は明石海峡から三十数年、ホ調交響曲から二十年目の作品である。』

菅原明朗は戦後の1951年になって、このように回顧している。「〜ピッツェッティの『交響曲』を聴いた時は、私の音楽生活の最高のエクスタシーの一つでした。あの曲では音楽のクライマックスが管弦楽の音響の増減とは関係なく描き出されて行きます。私の経験の範囲では、こんなことの出来る作曲家はバッハとモーツァルト、それからフォーレとドビュッシーだけでした。」(雑誌「音楽世界」1951年6月)加えてこのようにも書いている。「これに教わって、旋律というものを次のように考えるようになりました。『旋律とは、音の運動がトナリティ(注:調性)のイメージを作り出すリズムである。』旋律の勉強が、音楽への精進とそのメトードとを導いて行ってくれるただ一つの道だと思うようになりました。」

交響的幻影「イタリア」は、機能和声にも旋法的和声にも頼らず、音たちが向かう方向は気ままである。旋律は明確に聴きとることができても、音楽が進む方向は見えるようで見えない。しかし、時には琴線に触れる癒しの響きやリズムに出会う。イタリアの古い邑(村)の細い路地を歩んで行くと小さな教会が突然に現われたり、教会の中へ入ると街の人々の喧騒が消えて急に静寂に包まれる。絶え間なく流れてゆく時間と、視覚や聴覚に訴える不連続故の感覚と感動。そのような世界を描いたかのように、菅原明朗の世界は、捉え易く、かつ捉え難い。全曲は、平明な第1楽章、グレゴリオ聖歌あるいは和讃や御詠歌を連想させる第2楽章、晦渋なロンドたる第3楽章へと進む。

第1楽章

序奏 - 第1部 - 中間部 - 第2部 - コーダ、という形式である。序奏:弦楽器と木管楽器、続けて弦楽器と金管楽器を組み合わせた各4小節の序奏で始まる。

第1部(練習番号1〜):譜例1と譜例2、このふたつの主題がひと組みとなって7回繰り返される。旋律は、時に部分的に2度上の音に移されたり、ひとつの音のみ変化したりしながらわずかに変容する。組み合わせ主題が繰り返されるたびに、楽器譜例1



譜例2



の組み合わせも変わり、ダイナミクスが変化するが、全体としては静かにメゾフォルテに向かって高揚していく。中間部に入る直前、ヴァイオラと1stヴァイオリンに平明なフーガが現れる。中間部(練習番号9〜):突然、切迫した6連符の走句が弦楽器群に現れる。静まって、木管と低弦楽器による静かな動きの上で6連符はピアノ、木管、ヴァイオリンが連携する。練習番号10から、序奏の4小節動機をはさんで、低弦楽器に第2楽章の楽想を連想させる新しい動機が2度繰り返された後に、先ほど中間部に入る前に奏された、ヴァイオラと1stヴァイオリンの平明なフーガが再び現れる。

第2部(練習番号13〜):フォルテッシモで譜例1と譜例2の動機が再び現れる。この組み合わせ動機は、第1部と同じように楽器やダイナミクスを変化させて7回繰り返される。コーダ(練習番号20〜):序奏と譜例1から派生した動機がファンファーレのように奏されて、譜例1後半の音型を1stヴァイオリンが上昇させて静かに終わる。

前述の菅原の言葉、「旋律とは、音の運動がトナリティのイメージを……」の考えを試みて、かつシンメトリカルな構造を持たせた楽章である。

第2楽章

第1部 - 第2部(練習番号5〜) - 第3部(練習番号8〜)、という形式である。

第1部と第3部は3/4拍子、中間の第2部は少し早めのテンポによる4/4拍子の音楽である。各部ともに明確な動機は見出しがたい。しかし、楽章内のフレーズの始まりは、上昇する2度音程で開始されることが殆どである。グレゴリオ聖歌、和讃、御詠歌などを連想させる楽想で、フレーズの浮遊感と相まって、心癒される音楽である。菅原固有の音の流れであり、若き日に奈良に住み日本の古典を研究し、加えてイタリアへ想いを募らせた菅原でなければ作曲できない作品と言えよう。

第3楽章

ロンド形式の楽章である。全体の形式を大きく捉えると、序奏 - A - B - A - B´ - C - A - コーダとなっているが、Aの内容もまた、5つの動機が変容しながら繰り返される、ロンド形式の構造である。序奏とコーダを除く、6つの部分を第1部から第6部とする。

序奏:ティンパニーと低弦楽器による8小節のはじけるリズム。第1部(練習番号1〜):4小節単位で新しい動機が5種、a - b - c - d - eと並ぶ。続けて1stヴァイオリンによって6小節単位の異なるフレーズが3種奏される。2種目のフレーズの真ん中、すなわち第3小節目から、4小節単位の動機がa-b-cの動機が、対位的に重ねられる。加えて、これに序奏動機が重ねられるため、構造的には明確なのだが、隅まで聴きとることは大変に難しい。しかし、ひとつひとつは軽快で平易なロンドの動機が、混乱して聴こえてくる効果は、チャールズ・アイヴズ(1874〜1954)の音楽のような効果を狙ってのことかもしれない。練習番号4からは、a及びbのロンドの4小節の動機が6小

節に引伸ばされ変容して、フルートと1st ヴァイオリンによって奏される。

第2部 (練習番号 5 ～): 8分音符による3連音符、付点4分音符と8分音符、付点8分音符と16分音符の組み合わせによるマーチ風の特徴ある動機が、突然フルートに現われて始まる。多様な楽器によってマーチ風の動機が繰り返されて、突然終わる。

第3部 (練習番号 11 ～): 再び第1部の、連結されたa - b - c - d - eのロンドの動機が2回繰り返される。もちろん、1st ヴァイオリンの6小節間の対位法的フレーズも重ねられる。

第4部 (練習番号 14 ～): 第2部の変容である。理論的には理があっても、演奏することが困難な弦楽器のフラジオレット奏法も出現する。

第5部 (練習番号 19 ～): 第1楽章コーダのコントラ・ファゴットの旋律リズムの動機が、木管楽器と金管楽器によって盛大に奏される。

第6部 (練習番号 21 ～): 三たび第1部の連結されたa - b - c - d - eのロンドの動機が2回繰り返される。部分的に複調音楽ともなる。

第7部 (練習番号 25 ～): 第2部と第5部の動機が変容されて交互に奏された後、第2部のマーチ風の断片的動機がその全容を現わす。

全編で、菅原はかなりの作曲的冒険を試みていることがわかる。

<p>楽器編成：pic, 2fl, 2ob, cor-i, 2cl, b-cl, 2fg, c-fg, 4hrn, 3tp, 3tb, tu, tim, 2sd, td, cym, 2s-cym, tri, sistri, hp, pf, celesta, 弦楽5部</p> 初演：1971年8月27日　東京・虎の門ホール　指揮：荒谷俊治　管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団
<p>楽譜：スコア=日本近代音楽館　パート譜=民音音楽資料館</p>

菅原明朗　ピアノ協奏曲

この作品は、45年間演奏されずに眠っていた。日本近代音楽館の協力と、著作権継承者のご遺族の了解の下に、日の目をみることとなった。

菅原の協奏曲は、特定の奏者のために作曲されることが多いのだが、この作品の創作経緯は現在まったく不明である。

全曲は、連続する3楽章の形式である。楽章を追うごとにテンポは速まる。第1楽章は、イタリア・バロック音楽を連想させる、ファンファーレと擬バロック音楽的なソロ・ピアノとが交錯する、非常に即興的かつ人工的とも言える作品。第2楽章は、9/8拍子で菅原独自の音階による、非和声的音楽と和声的音楽が交錯する。第3楽章は、おそらくトッカータとフーガの様式である。

第1楽章

大きく2部に分かれる。12小節間のオーケストラの序奏の後、独奏ピアノが始まる。4拍子の小節に、3拍子の擬バロック的なピアノの動機がはめこまれて、3度繰り返される。すぐにフルートが4拍子のオブリガートを奏すると、対位法的にピアノの右手は、拍子を1拍ずらせて4拍子の動機を三度繰返す。左手は本来の4拍子に合致した低音部を演奏する。以後、異なる動機が現れては、異なる単位に複数回繰返し奏される。繰返しのたびに音型は右手も左手も変化をする。練習番号7で、木管楽器による快活で明快な9小節間のユニゾンの音楽が現れる。すぐに練習番号8に入ると第2部が始まり、独奏ピアノが冒頭のフレーズに戻り、フレーズの音程を2度あげて奏する。第1部の数種の動機を刈りこんで並べた後に、独奏ピアノが16分音符6連音の走句を軽やかに奏でて終わる。

第2楽章

菅原は、この楽章で不思議な旋法を使用する。冒頭の独奏ピアノの動きを追うと、次の音階となる。

A－B－Cis－D－Es－Fis－G。オクターヴに、#2つとb2つ。CisからFisまでは、メシアンに限られた旋法第4番の前半に一致するが・・・、不思議な音の並びである。その萌芽は第1楽章に見られた。

形式は、以下のように捉えられる。

大きくふたつの主題A、Bからなる主部を、2度提示する。(練習番号8までが1回目、練習番号16までが2回目。また、ふたつの主題AとBを、1回目の範囲で示すと、Aが冒頭から練習番号3まで、Bが練習番号6から8まで。)

練習番号14から、大きく、主題Aを展開する。練習番号19から、大きく、主題Bを展開する。

練習番号20に新しくファンファーレ的な動機が金管楽器に現われて進むと、練習番号21で主題Aが回顧されて、練習番号23のコーダに入る。金管楽器と中低弦楽器が奏でるコラールに、木管楽器とヴァイオリンが涼やかなレースの様なオブリガートをまとわせる。このコーダは、**確実に交響的幻影 イタリア**の第1楽章を連想させる。

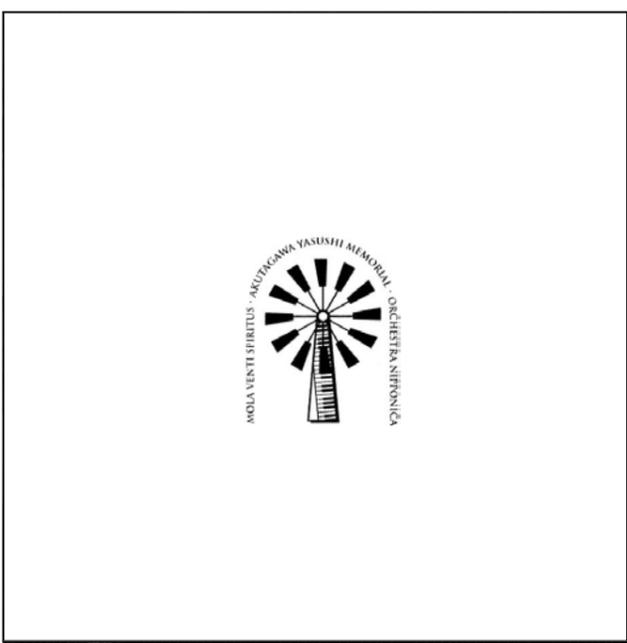
第3楽章

自由なトッカータと、平易な主題によるフーガによる楽章と捉えることができる。フーガ部は3回現われて、最終部はトッカータ的な独奏ピアノの走句とオーケストラによるフーガが重ねられて、弦楽器のC-Esの和音であっけなく終わる。

<p>楽器編成：2fl(2nd=pic 持替), 2ob(2nd=cor-i 持替), 2cl, b-cl, 3fg, 4hrn, 3tp, 2tb, tu, sd, td, bd, cym, 2s-cym, t-t, 弦楽5部</p> 初演：2016年2月14日　東京・紀尾井ホール　Pf：高橋アキ　指揮：阿部加奈子　管弦楽：オーケストラ・ニッポニカ 楽譜：スコア=日本近代音楽館　パート譜=オーケストラ・ニッポニカ作成

ピッツェッティ　交響曲イ調

この作品は日本においては、1940年の初演以降、一度しか演奏をされていない(海外を除く)。再演は、東京フィルハーモニー交響楽団の第48回定期演奏会、1959年1月12日、日比谷公会堂、指揮はイタリアから招聘されたアルベルト・レオーネで



あった。この交響曲が再演されない理由は、いくつかあるだろう。紀元2600年奉祝作品であることがひとつ。しかし、ブリテンの「シンフォニア・ダ・レクイエム」は勿論、イベールの「祝典序曲」、R. シュトラウスの「皇紀2600年奉祝音楽」は、たびたび再演されている。ふたつめは、作品自体が良く理解されていないこと。おそらく、これに尽きると思う。

この交響曲について、欠かすことのできない文献は、「現代イタリア音楽 天野秀延 音楽之友社1960」である(素晴らしい内容であり、復刻を望みたい)。この著作の「あとがき」を寄せたのは、菅原明朗である。菅原の書いた記録に次のような記述がある。「1948年(昭和23)。天沼に移り、悪質なる住居詐欺になやまされ、生活は極度に低下す。秋、仙台に旅し、帰途A君を訪ね、ピッツェッティ、マリピエロの近作に接し、加えてこの二大家がA君に宛てたる最近の尺翰数通を読み、余が音楽上の信念を強く裏書きされたる心地して大に気丈になり得たれども、今後益々孤独の境涯に向かう覚悟の必要を切々と思う。」(聖譚楽 預言書 創作誌記 手稿 1957「マエストロの肖像 - 菅原明朗評論集 - 松下鈞編 国立音楽大学附属図書館 1998」より)

この記述の中のA君こそ、天野秀延である。544頁の大著であるが、ピッツェッティについては87頁、交響曲については6頁が割かれている。これを参考にしながら、独自の見解も加えて作品の内容を追ってみたい。

まず、交響曲のスコア(総譜)についてであるが、当プログラムのコラム「ピッツェッティ作品の楽譜物語」に書かれているように、出版スコアに3種ある。奉祝会版、リコルディ社1942年版、同1944年版。1942年版は市販スコアで、1944年版はレンタル・スコア。幾つかの相違点がある。

①リコルディ社の2種のスコアの冒頭には「A Riri」とあり、奉祝会版には記載がない。Ririは、亡くなったピッツェッティの夫人であり、交響曲はRiri夫人に捧げられている。

②奉祝会版では、ハープ2台の指定があるが、リコルディ社版2種では1台の指定である。

③奉祝会版の第3楽章練習番号49のハープ2小節分が、リコルディ社のふたつの版ではいずれもチェレスタとなっている。

音の相違は、リコルディ社版出版時に校訂がおこなわれてい

るはずなので、他にもあるものと思われる。重要なポイントは、①である。日本政府に委嘱され奉祝祝賀会に贈られた作品が、改められて、夫人に捧げられている事実。

第1楽章

全体は自由なソナタ形式である。

序奏：冒頭は、序奏を兼ねた循環主題の提示。循環主題は譜例3で、交響曲全楽章に使用されて、曲想の統一をはかっている。主題は、グレゴリア旋法による。ピッツェッティのヴァイオリン・ソナタ(1918)も同じ基調によっている。作曲家・柴田南雄(1916～1996)によれば、主題の音階はE(ミ)から始まってE(ミ)までの音階(フリジア調)なので、主音のE(ミ)に向かって半音で降下する導音、つまりF(ファ)→E(ミ)を持っている。これが抒情的ないし悲劇的な発想に実に効果的に作用する。従って、「イ調」といってもへ長調の調子記号なのである。すなわち、イ音(A)を主音とするフリジア音階を設定すると、変口音(B)を導くためにへ長調の調子記号になるということである。譜例3の4小節目の最低音を移動ドで読むと、ミ。乗降する音を拾っていくと主題は、ミからレ(ミ)までのフリギア調の音階であることがわかる(参考：おしゃべり音楽会 柴田南雄 245頁 青土社 1988)。

序奏の8小節目には、循環主題に重ねて、譜例4が低弦楽器に出る。上昇する半音階が不安を感じさせる。トランペットが循環主題を3連符で高らかに奏すると、オーケストラ全体は急速な下降音型で崩れ落ちて、練習番号4で提示部に入る。

提示部 (練習番号4～): 譜例4が低弦楽器に連続して現われ不安をかきたてる。すると、この楽章の主要主題とも言える譜例5が1st ヴァイオリンに現れる。この主題は、ピッツェッティの「夏の協奏曲」(1928)の第1楽章「朝の曲」のオーボエ主題を連想させる、彼の好きな音の動きである。譜例5が変容しながら進むと、ファンファーレのような、進軍ラップのような譜例6の動機が現れる。この間、譜例4の不安の動機はずっと鳴りやまない。練習番号7を過ぎるまで、音楽は譜例4、譜例5の断片、譜例6の動機だけで書かれている。

進軍ラップの動機が重なり合って切迫すると、譜例5が激しい緩急を付けて高揚する。

序奏を含む提示部の確保(練習番号9～): フルートによって、



練習番号 77 では、第 3 楽章の譜例 12 の動機の組み合わせとまったく同じ動機で作曲がなされている。練習番号 78 からの、まるでラフマニノフを連想させる“歌”も循環主題から派生していることは、誰もがわかることであると思う。

このように、循環主題のみならず、第 1 楽章に出現した動機が全楽章で使われており、ピッツェッティの作曲の優れた手腕が窺われる。

練習番号 93 の 5 小節目からコーダに入る。ヴィオラが、この楽章の冒頭のティンパニーと低弦楽器のオスティナートを再現すると、循環主題にラメント的半音階進行が静かに寄り添う。練習番号 95 で、オスティナートはコントラバスに引継がれて 3 連音符に変化する。これに乗って、チェロのソロで、ピッツェッティのヴァイオリン・ソナタの第 2 楽章「無実の人々への祈り」の主題が引用される。この表題を付けるのにピッツェッティは長い間熟慮を重ねた、伝えられる (M.Gatti)。これは、故なくして戦い、罪なくしてたおれた人々への祈りの歌である。また、3 連音符のバスはチェイコフスキーの交響曲第 6 番の最後を彷彿とさせる。

練習番号 97 からは、ヴァイオリンが 7 小節にわたって上昇して行くのに添って、循環主題譜例 3 の②の音型が転調しながら 4 回繰り返されて、曲はティンパニーとコントラバスがイ音を刻みながら静かに終わる。

この作品の全曲を辿ってみると、内容がいかに祝祭的な要素から遠いものであるかが理解できる。1939 年にドイツがポーランドに侵攻して、イギリスとフランスが宣戦布告したヨーロッパの情勢に対して、ヴァイオリン・ソナタの第 2 楽章を第一次世界大戦で犠牲となった人々に捧げたピッツェッティは心を痛めていたと思う。

楽器編成：3fl(3rd=pic 持替), 2ob, cor-i, 2cl, b-cl, 2fg, c-fg, 4hrn, 3tp, 3tb, tu, tim, bd, cym, 2sd, t-t, hp, celesta, 弦楽 5 部
初演：1940 年 12 月 7 日　東京・歌舞伎座　指揮：ガエタノ・コメリ　管弦楽：紀元二千六百年奉祝交響楽団（宮内省楽部、東京音楽学校管弦楽部、新交響楽団、中央交響楽団、星櫻吹奏楽団、東京放送管弦楽団、日本放送交響楽団）
楽譜：スコア & パート譜＝リコルディ社

【菅原明朗 略歴】

作曲家、教育家。1897 年 3 月 21 日兵庫県明石市生、1988 年 4 月 2 日東京没。

京都第二中学校在学中、小島賢八郎にソルフェージュとホルンを師事。1914 年上京し、川端画学校に入学して、藤島武二に師事して洋画を学び、1918 年に卒業。このころ太田黒元雄、堀内敬三、大沼哲らと知りあう。1915 年に最初のピアノ作品が太田黒元雄のサロンで演奏される。1919 年奈良に移り住み、日本の古典を研究。1921 年同志社大学で音楽指導、神学部で音楽文化史を講義。1926 年オーケストラ・シンフォニカ・タケキの指揮者に就任。1930 年帝国音楽学校作曲家主任教授。新響（現N響）を指揮するようになる。作曲分野では純音楽、映画音楽、さらには西洋音楽を日本音楽に取り込み、伝統音楽を再生させる試みもおこない、戦後の洋楽の作曲家たちにも大きな影響を与えた。また永井荷風との共作、友情の物語は有名。加えて生涯に 500 を超える執筆活動のほか、指揮活動をおこない、敗戦直後までプーランク、ミヨー、サティ、オネゲル、フローラン・シュミット、日本の作曲家、自作などの作品の初演を旺盛におこなう。戦

争直後は生活に苦勞しながらも創作に励み、特に 1970 年代以降、70 歳を超えてから 100 を超える作品を創作している。未だ演奏されていない、大作を含む数多くの作品が残っている。幅広い知識と教養を持った人物であった。弟子に、深井史郎、服部正、伊藤昇、吉田隆子、小倉朗、古関裕二、宅孝二らがいる。著作に「楽器図説」(音楽之友社)、「楽器のはなし」(共同通信社)、「和声法要義 (リムスキー・コルサコフ著の翻訳)」(音楽之友社) などがある。

【イルデブランド・ピッツェッティ 略歴】

イタリアの作曲家、教育家。1880 年 9 月 20 日パルマ生、1968 年 2 月 13 日ローマ没。

ピアノ教師の家庭に生まれる。少年期は演劇に没頭し、台本も執筆。1895 年、パルマ音楽院に入学。テレスフォロ・リーギ及び、院長に赴任したジョヴァンニ・テバルディーニに師事。テバルディーニを介して 15 世紀から 18 世紀のイタリアの音楽を学び、ことにパレストリーナに深く傾倒した。パルマ王立歌劇場副指揮者、パルマ音楽院教師、フィレンツェ音楽院教師及び院長を経て、ミラノ音楽院及びサンタ・チェチリア音楽院で院長を務めた。イタリア王立アカデミー会員。作曲活動のほか、音楽批評の執筆、指揮活動はヨーロッパ及びアメリカでも活動した。代表作に歌劇「イフィゲネイア」、「大聖堂の殺人」、合唱曲「レクイエム」、声楽曲「牧人たち」、「ウンガレッティの 2 つの詩」、管弦楽曲「夏の協奏曲」、組曲「ピサの娘」、ヴァイオリン・ソナタ、チェロ・ソナタ、弦楽四重奏曲第二番などがある。

ニッポニカの活動は、下記の図書館に支えられ、アーカイヴされています

■東京音楽大学付属図書館

2014 年に開設した「東京音楽大学付属図書館ニッポニカ・アーカイヴ」は、オーケストラ・ニッポニカが演奏会で使用した楽譜の一部を東京音楽大学付属図書館へ寄託し、それを広く演奏に供するために同図書館が運用を行っているものです。実際の運用につきましては、次のウェブサイトをご参照ください。

東京音楽大学付属図書館ニッポニカ・アーカイヴ
http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/nipponica/

2015 年 12 月現在の寄託楽譜は、次の通りです。

- 芥川也寸志：『舞踊組曲「蜘蛛の糸」』『GX コンチェルト』
- 安部幸明：『オーケストラのための交響的スケルツォ』『交響曲第 2 番』『オーケストラのためのセレナーデ』『ピッコラシンフォニア』
- 池野成：『ダンス・コンセルタンテ』『ラブソディア・コンチェルトンテ』
- 石井眞木：『交響的協奏曲』
- 伊藤昇：『マドロスの悲哀への感覚』『シロカニペ ランラン ピシュカン』『二つの抒情曲』
- 伊福部昭：『シンフォニア・タブカーラ』
- 今井重幸：『ゴジラのフラメンコ』
- 紙恭輔：『木琴と管弦楽のための協奏曲』
- 篠原眞：『ロンド』
- 清水脩：『交響曲第 3 番』
- 橋本國彦：『感傷的諧謔』『笛吹き女』
- 早坂文雄：『二つの讃歌への前奏曲』『左方の舞と右方の舞』『弦楽のためのアダージョ』『讃頌祝典之樂』『海の若者』『ピアノ協奏曲第 1 番』『交響曲第 1 楽章』『映画音楽「羅生門」より』『交響組曲「七人の侍」』（松木敏晃編曲）
- 平尾貴四男：『古代讃歌』
- 深井史郎：『大陸の歌』『平和への祈り』『架空のバレエのための三楽章』
- 藤田正典：『いにしえの飛鳥へ』
- 松平頼則：『南部子守唄を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲』
- 宮原禎次：『交響曲第 4 番』
- 山田和男：『若者のうたへる歌』『もう直き春になるだらう』『交響的「木曾」』『交響組曲「呪縛」』『おほむたから』『日本の歌』

■明治学院大学図書館付属 遠山一行記念 日本近代音楽館

日本の近代・現代音楽を対象とする専門資料館である明治学院大学図書館付属日本近代音楽館は、日本近代音楽財団より蔵書、資料の寄贈を受け、2011 年 5 月に図書館付属機関として開館しました。オーケストラ・ニッポニカは設立以来、演奏会企画及び演奏譜の調達に際しては、日本近代音楽館の多大なご協力をいただいております。ウェブサイトは次の通りです。

明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

http://www.meijigakuin.ac.jp/library/amjm/

オーケストラ・ニッポニカ第 6 弾アルバム。 強烈に放たれる音響エネルギー！



池野成
ラプソディ・イン・ブルー
指揮：石井眞木

EXTON
DSD RECORDING

池野成：ラプソディア・コンチェルトンテ
石井眞木：アフロ・コンチェルト

オーケストラ・ニッポニカ

阿部加奈子 (指揮) ① - ②)
高木和弘 (ヴァイオリン) ①)
野平一郎 (指揮) ③)
菅原淳 (パーカッション) ③)

① 池野成：ラプソディア・コンチェルトンテ
② 今井重幸：ゴジラのモチーフによる変容「ゴジラのフラメンコ」
③ 石井眞木：打楽器とオーケストラのためのアフロ・コンチェルト

作品 50 ヴァージョン B

オーケストラ・ニッポニカ CD 好評発売中

林 光：交響曲ト調 他／本名徹次 (指揮)／品番：OVCL-00381 ■芥川也寸志：子供のための交響曲「双子の星」(ほか／本名徹次 (指揮) 岡寛恵 (語り) すみだ少年少女合唱団)／品番：OVCL-00415 ■伊福部昭：管絃樂の鳥の音詩「寒帯林」、深井史郎：カンタータ「平和への祈り」／本名徹次 (指揮)／品番：OVCL-00433 ■芥川也寸志：ヒロシマのオルフェ、音楽と舞踏による映像絵巻「月」／本名徹次 (指揮)／品番：OVCL-00 ■もう直き春になるだらうー山田一雄 交響作品集一／田中良和 (指揮) 山田英津子 (ソプラノ)／品番：OVCL-00459

CD	
価格	¥2,700 (税込)
ジャンル	管弦楽曲
品番	OVCL-00583
仕様	2ch
JAN コード	4526977005832
発売日	2016/01/22